

米國の秋と音樂

安 村 楨 子

夏の間は海濱や山間に避暑する人々が多うございますから、さうした避暑地に於ては音樂が盛んに行はれて居ますが、九月の聲を聞きますと、そろ／＼避暑地から人々が都會に集つてまゐりますから、ニューヨーク、ボストン等では、秋は音樂のシーズンになつて居ります。

何處の町を通つて見ましても、夕飯過ぎにはピアノ、ヴァイオリン、子供等の唱ふ聲が楽しさうにもれ聞えて來ます。老人も若夫婦も、隣近所の人達まで招きにあづかつて、皆仲よく揃つて集ります。日本の家庭によく見るやうな偏見といひませうか、社交馴れてないといひませうか、誰が行くなら私は行かないとか、私は音樂は下手ですから、等と惡慮慮をするやうな人はありません。それは仲よく廣い心をもつて、皆一緒に楽しみます。これは家庭の娛樂としてばかりでなく、子供の音樂の趣味を養ふ目的からも行はれてゐます。子供が六七歳位にもなりますと、

耳から教へ込む、といふ習慣をつけるやうにしてゐます。高尚なたゞしい音樂を絶えず聞かせる、といふことは、音樂に對してひとりでのよい教育をうけさせる事になります。そして初めは、いたづらのやうに、ピアノを弾かせたり、又歌はせたりして置きます。それが段々と、年齢が進むにつれて、ほんどに上手な音樂となるのでございます。かうして幼い時から、音樂に耳をならして置きますと、ピアノなしでも歌ふ調子が狂はないやうになるのでございます。それから、ダンスを教へる、といふ事も音樂を上達させるよい方法であります。ダンスをしますと、手や足を運す時に、リズムに對しての感じを得ますから、それが音樂の調子を早くのみ込む便利になります。その上、子供の事ですから、面白いマーチに合せて踊る、といふ事は、この上もなくうれしいのに違ひありません。

子供には、音樂に限らず何でもさうですが、殊に

音樂のやうに感じを重んじるものは、いやがる時に無理に練習させるといふ事が一番よくない結果をもち來らします。さうですから、子供が氣がすむ時にばかり練習させる風にして居ります。只今私の所にお出でになりますがお嬢さんがピアノの練習に喜んで居ります。お嬢さんについてくるお母様が、私も遅ればせながらピアノのお稽古をいたしませう、と仰つてお子さんと御一緒に始められたのでございしますが、かう云ふ風に御母様から熱心になすつて下さいますと、御子さん方の御上達もつと早うござります。つまり母親の教養は直接子供にうつるものでございしますから、母親からもの事を始めるは一番大切であります。

只今米國ではどんな風なものが好まれてゐますかと申しますと、私が一昨年ボストンの音樂學校に通學して居りまして、昨年秋日本に歸つてまゐりましたばかりでございしますが、ライトオペラ、軽いあつさりした、而も面白いオペラが喜ばれてゐるやうです。この傾向は次第に東京あたりにも流行して來つたつあるやうです。グラントオペラやシンフォニーの

やうな壯麗な古典的なものは、或一部の人々の研究にまかせて置いて、民衆音樂としては、柔い感じのする喜歌劇が喜ばれてゐます。又芝居よりもよい文藝的活動寫眞を觀にゆく人々が多うございします。これは米國の社會生活の影響から來たもので、向ふの勞働時間が短いわりに非常に熱心に働きますから、能率が非常に高いのでございします、その代り精神を使ふ事が大したものです。私が去年歸朝いたしました折に一緒に日本に來ました三菱の技師の方がおつしやるには、同じ人數の職工で米國で三ヶ月かゝる仕事、日本では三倍の九ヶ月もかゝる、と驚いて居りましたが、實にさうでございします、會議でものびのびになるのでございします。このやうに短時間の間に、能率を上げるのですから、勞働後の身心の状態が非常に疲労しますから、むづかしい劇を見る事は身體が耐へられませんですし、それに立派な劇場にゆくには、相當にお仕度が必要ですものですか、簡單で然し上品なもの活動寫眞等が善ばれるのでございします。

日本ではまだ、音樂會が足りないやうに思はれます。あちらでは公會堂が一區に一ヶ所位は必ずも

うけられてありまして、海軍軍樂隊が雇はれまして、民衆音樂會として無料で音樂會が催されます。向ふでは、音樂家が至るところで、自分の藝術を公衆に發表する機會が多うございます。たとへば、ホテルに招かれて音樂を演奏する等といふのは、一流の音樂家にはよくあることで、日本等で云ひますと、大層下品なやうなことに思はれてゐますが、あちらで

は決してさうでなく、待遇も實に敬意を以て行はれてゐるのです。私共の學校の教授で、音樂史等に熱心な筆をこめて居られました故エルソン氏のやうな方は、音樂會のある毎に、一生懸命奔走して居られました。日本にもどうかもう少し音樂會が流行すればよいと、音樂のシーズンを前にひかへて希望して居ります。

「子供のお家」の創立に就いて

察母 門 田 ツ ヤ

勞働者階級のお子さん達のお世話をする託兒所は、近來各所に設立されました事は非常に喜ばしい事でございますが、中流以上の家庭の人々でも、社會生活の向上に伴ひまして、やはり託兒所の必要があるやうに思はれるのでございます。私がかねてからの希望をやつと實現する折がまゐりまして、「子供のお家」といふ名の下に、お母さん方に代つてお子様のお世話を致したいと存じて居ります。

さて私がかうしてお子様に親しみたいと思ひます

のも、私自身の身の上から切にさう感じて参りましたのでございます。明治四十一年に目白の日本女子大學を卒業後、間もなく當時臺灣に勤務中の主人に嫁しまして、二人の子供の母となつて暮して居ります中、不幸にも大正三年四月十二日、主人は亡くなつてしまひました。この時長男は四つ、下の女の子は二つでありまして、これが何事もわきまへぬ小さい子供達の不幸な生活の第一歩でございました。か弱い女の細腕に二人のものをまかせられた私は、一時茫